独立行政法人地域医療機能推進機構群馬中央病院
令和８年度 第一回地域協議会　議事録

日　時：令和８年９月１１日(金)１４：００～
場　所：別館２階 大会議室
主　題：「当院の運営状況について」

＜当日出席委員＞　１４名

高橋　淳	群馬県健康福祉部長
大西　一徳	前橋市保健所長
山下　誠一	前橋市消防局長
川島　崇	群馬県医師会副会長
直田　祐子	前橋市医師会長
細内　康男	群馬県済生会前橋病院長
平田　卓也	紅雲町一丁目自治会副会長（代理出席）
内藤　浩	当院院長
伊藤　理廣	当院副院長
河野　美幸	当院副院長
湯浅　和久	当院副院長
中内　大輔	当院事務部長
茂木　香里	当院看護部長
坂本　治彦	当院薬剤部長

＜欠席＞　４名

猪俣　理恵（前橋市副市長）
外山　卓二（前橋医師会病診連携理事担当理事）
清水　奈保（群馬県看護協会専務理事）
寺内　正紀（当院副院長）

計　１８名

順不同、敬称略とさせていただきますことをご容赦ください。

＜議事概要＞

１　院長挨拶
２　委員紹介
３　運営状況、活動報告等
４　意見交換
５　その他

項目１および２について

省略

項目３　当院の運営状況について（内藤議長より報告）

１　経営・診療実績

（１）　経営状況および紹介率について

昨年度経営成績はＪＣＨＯ東日本地区２５病院中１位を取得した。本年度について、出だしは低調気味であったが徐々に回復してきている。病床利用率は８７．４％とほぼ満床であり、小児科については緊急用に一部空きを確保してある。紹介患者数は順調に伸びてグループ内でも上位クラスであり、地域連携センターを中心に円滑な連携・業務一元化を推進している。

（２）　救急・健診実績について

- 今年はやや減少傾向だが、昨年の救急受入台数は２，８３１台を受け入れた。
- 健診者数データ比較においても当院はＪＣＨＯグループ内で上位に位置している。

２　病院の方針・機能

（１）　「医療・包括ケアの要」としての機能推進

急性期Ａを取得し、前橋市や群馬県における医療体制の整備や地域包括支援センター前橋の受託などを実施。今後の２０４０年に向けた地域医療構想を見据えて、「医療・包括ケアの要」として医療と介護の連携や、受託施設とも連携した地域に根ざした取り組みを行う。

（２）　診療・周産期医療・小児医療の取り組み

- 少子化が進む厳しい環境下でも、産科は病室改装や無痛分娩の開始など環境を整備し、難しいお産も受け入れている。また、埼玉など広い地域からの受け入れも視野に入れている。
- 小児科は河野副院長を中心とした体制で、地域母子周産期医療センターとして専門性の高い医療を提供しており、小さな子どもの受け入れにも力を入れている。

３　その他（地域貢献・交流、広報活動、人材確保など）

- １０月３１日には健康づくりを目的とした「けんこうまつり」を開催予定。８月２９日には院内で納涼会を開催し、ＡＥＤ体験やイベントを企画し、多くの地域住民や子供たちと交流した。
- 褥瘡や摂食嚥下障害、認知症などに深い専門知識を持つ認定看護師の無料派遣を従来から行っている。地域の勉強会や会議等での活用をいただければと考えている。
- インスタグラムを開設し、すでに１，４００名のフォローがあり、当院の良さが伝わるような発信に引き続き取り組んでいきたい。
- 県立高崎高校の生徒を対象とした職場体験（施設見学や職員との座談会）を実施。また、県立前橋女子高校からの「誰にも合う化粧水の開発」をテーマにした学習受け入れも行っている。
- ７月にＪＩＣＡ主催の研修を受け入れ。当院の感染認定看護師や医療安全担当者が講師を務め、日本の医療安全の取り組みや現場の実情を伝えた。
- 初期研修医の応募は３倍以上となり、これからマッチングしていく。県内の医師を増やす取り組みとして奨学金制度を設け、これまでに１名の採用実績がある。

項目４　意見交換

高橋）　地域に親しまれ、そして、なくてはならない病院だと感じた。ところで、平均在院日数はどれくらいなのか。

内藤）　１１から１２日である。

高橋）　承知した。病床がほぼ満床で紹介率も非常に高い中、患者の居住地は前橋市内が中心なのか、それとも隣接地域外からも含まれるのか。

内藤）　診療科によっては差がある。小児・整形は県内全域から。特に小児は埼玉からも来院されている。外科は前橋市が中心である。

高橋）　県内全域の病院で、以前は医師不足が課題だったが、現在は深刻な看護師不足を耳にする。今年の看護師の採用・不足状況について教えてほしい。また、新卒の採用が多い場合、県内の大学出身者が中心か、それとも県外や養成校出身者なのか。

茂木）　今年度は看護師の受験者が増加し、看護師の確保は逼迫した状況ではない。

年々、採用対象となる大学の数が減少している傾向にある。県内には多くの学校が存在するものの、学生が県外へ進学・流出している可能性がある。

専門学校自体の受験者数には大きな変動は無い一方で、専門学校の閉校数が増加傾向にある。群馬県はこれまで多くの看護学校が存在したため、採用面で恵まれていたが、こうした背景から徐々に採用環境に変化が生じているのは感じている。中長期的に注視していく必要がある。

内藤）　看護師の確保については、看護師学校界隈で問題となっている。今後はさらに心配になると思う。みんなと協力して情報共有し、取り組む必要があると思っている。

高橋）　看護師の確保の話は多方面で聞いており、医療機関だけでなく、介護施設からも聞く。養成所の関係でいうと、やはり医師会立の養成所の定員を満たせず、経営も厳しい状況にある。先程、茂木委員からの話の通り、他県に比べると、看護学科を設置している大学の数は多いが、本県の特徴として、卒業生の約半数以上が県外に出て行っている現状である。県内で勉強された方を県内の医療施設や介護施設に勤めて頂くなど、定着への方策を進めていかなければならない。ぜひともお知恵を拝借させていただきたい。

内藤）　この問題は一緒に考えていきたい。当院も実習病院としてできる限り広く受け入れたいと思っている。看護師さん達も頑張っているので、当院としても協力したい。

山下）　日頃からの医療機関の皆様のご協力に対し、深く感謝申し上げたい。令和 7 年度の救急出動件

数は近年で最多水準となる２万７３０件を記録し、その中で群馬中央病院様には前年度から１１２人増となる２，３６７人の患者を受け入れていただいた。特に１５歳以下の小児を含む受け入れに特化し、二次救急体制の重要な受け皿として多大なご貢献に心より御礼申し上げたい。今後も連携を密にし、市民が安心して医療を受けられる体制の充実に努めていく。

内藤）　救急車の受け入れも、当院もできるだけ頑張っていきたい。今年は受け入れが少ないと思っているが、出動件数が少し減少しているのか。

山下）　救急について今年は昨年に比べると全体で２％減である。

内藤）　救急医療は地域全体で支える必要があるため、今後は様々な医師の皆様とも意見交換を進めながら、地域一丸となって体制を支えていきたいと考えている。

川島）　お話があった通り、看護学校についても減少傾向でかなり厳しい状況にあり、どうにかしなければならない。もう一つは研修医について、是非とも研修医が群馬県で学び続けられるようにお願いしたい。

内藤）　研修医は面接の段階でそれらを考慮しながら進めている。マッチングが大事だと考えている。

直田）　私の所の研修医も群馬に定着できていない。若い子は外に出たがるので、いずれは群馬に戻ってくれば、それはそれで良いかもしれない。とは言え、なり手がいないのか、うちの看護学校も深刻な定員割れで経営に深い危機感を抱いている。看護学校へ行った若い子は、どこで働くとなったら都会に行く志向があるのかと思う。群馬の良さを小刻みにアピールし、教育委員会などを巻き込みながら、若い世代の地域定着に向けて取り組むしかないのかと思っている。今年の受験者数も更に減少しており、対策を考えていくしかない。

細内）　人口減少や高齢化が進む中、病院間の協力や役割分担、職員同士の密な連携による経営改善が必要である。特に、他職種の給与が上がる一方で医療職の給与が相対的に低下していることが最大の課題であり、国の施策も含め、病院経営を安定させて職員に還元していかなければ医療職の確保は極めて困難な状況だ。今後も情報共有を図りながら、共に医療体制を支えていければと思う。

内藤）　処遇改善の重要性は理解しつつも、診療報酬の制限により病院経営が非常に圧迫されている状況である。私たちも声を上げて、行政とも一体となってこの課題を進めていきたい。

大西）　日頃より感染症対策など多大なるご協力をいただき、皆様には感謝を申し上げたい。特に小児科を診ていただける病院が少ない中、貴院には大変お世話になっている。この度、小児科の先生が副院長にご就任されたとのこともあり、引き続きのご協力をお願いしたい。併せて、今後の超高齢社会や人口減少を見据え、貴院の対策や、今後の備えをお聞かせいただきたい。

内藤）　人口減少と高齢化が進む前橋市では、高齢者救急の受け皿も考えなければならないが、その前段階として何をどうするべきかといった課題を、地域医療構想の中で話し合う必要がある。

先日の会議では、想定患者数が少ない上に急性期・超急性期ベッドが１，０００床以上多いとのシミュレーションが示されたが、現場の急性期病院はどこも満床に近く、現状との大きなミスマッチを感じる。前橋の医療機関は広い医療圏からの患者を受け入れているため、単一の市の人口だけでなく医療圏全体として広く比較する視点が大切で、その視点を見据えつつ、済生会、日赤、大学病院などと話を進めていくことが重要だと考えている。

平田）　貴院が様々な尽力をされていると聞き、それを発信することが自分の役割だと思っている。当町内も少子高齢化でコミュニティの維持が厳しい中、貴院の納涼祭はコミュニティや横のつながりを維持する上で大変大きな支えとなっている。紅雲町一丁目だけでなく桃井小学校地区の子供たちも参加しており、心から楽しませていただいた。これからも続けていただきたい。

内藤）　地域包括ケアの一環として、地域を盛り上げていくことは非常に大切だと考えている。

伊藤）　先程、院長より説明通り、少子化や同業のクリニックが減少する中、妊婦の皆様のニーズに応えるため、部屋の改装や美味な食事の提供、さらに無痛分娩の導入に取り組んでいる。患者様に寄り添った医療を提供していきたい。

内藤）　小児科と同様、より安全な分娩を心がけており、民間施設では対応が難しいお産も当院で引き受けできる体制を整えている。

河野）　小児科のベッド数は小児医療センターに次いで多く、医師１３人体制であたっている。感染症の流行時には当院がストッパーとなり、県外への患者流出を防ぐようにしている。土曜日の輪番制の空白時間帯についても、日赤など他の医療機関と協力し、積極的に対応したい。

湯浅）　昨年から地域医療センター長を併任し、「けんこうまつり」を新たに開始した。従来の病院の「体調が悪いときに行く場所」という敷居を下げ、健康な状態から気軽に集まれる地域のコミュニティをつくりたい想いで立ち上げた。昨年は高齢者の方が中心に参加されたが、今年は小さなお子様や若い世代も楽しめる催しを企画している。今後は小学校や幼稚園などへ周知をしていきたい。

中内）　日頃より患者様から様々なご要望、ご意見をいただく中、患者様だけでなく、行政の皆様や地域の皆様からのご意見、ご要望についても、ぜひ色々な視点からいただきたい。

茂木）　看護師の採用はもちろん、現在は看護補助者の不足が特に深刻。しかし、人手が足りないからといって誰でもよいわけではなく、ワークシェアリングを進める上で、質の担保に苦慮・検討している状況である。派遣や委託という手段はあるが、人件費との兼ね合いもある。質の担保を最優先し

つつ、どのように体制を整えるべきか、ぜひこの場を通じて皆様と情報共有できればと思う。

坂本）　看護師に続いて、病院薬剤師も日本全国で減少し、かなり困窮した状態である。病棟での医療安全のため薬剤師を一名配置して医療安全のために貢献しているが、６月の診療報酬の改訂によって、試算により当院で二名増員が認められた。来年の４月から配置する。急性期病院のＡを取得しているので、救急の充実のため専門の薬剤師を一名配置する。また、手術関係も手薄にならないよう、もう一名配置する構想を練っている。

細内）　先程、茂木委員より看護補助者についてお話があったが、外国人の採用は考えているか。

茂木）　外国人もいずれ考えないといけない課題である。当院は今のところ、外国人の採用はない。同じＪＣＨＯ病院の中でも首都圏の病院は外国人の採用を始めた。当院としては、先ずは派遣で外国の方を入れて、様子を見てから考えていきたい。

細内）　済生会は外国人の採用について検討しており、看護部長が先日、芳賀日赤まで見学へ行ってきた。芳賀日赤は１０人看護助手を採用し、評判はかなり良いとのことである。数名採用考えていたが、芳賀日赤を見学した看護部長より増員してほしいとの提案を受けたので増員を許可した。来年に向けて準備しているが、是非とも見学に来てほしい。

内藤）　これはとても重要な問題である。看護助手の解決策として、ＪＣＨＯ秋田病院では看護部長、事務部長がインドネシアへ行ってパイプを構築している。この問題については情報共有をしながら進めていきたい。

項目５　その他

なし

以上